

愛媛大学 上月翔太

授業科目数削減の実践 求められる。なお、カリキュラムの学習目標との対応が難しい授業科目を「発展科目」などの科目群にまとめるということも考えられるが、授業科目削減という観点からは安易にとられるべき選択肢とはいえない。

削減を進めるうえでまず行うべきは、ディプロマ・ポリシーに定めたカリキュラムの学習目標との対応による精選である。それぞれの授業科目がカリキュラムの学習目標とどのように対応しているかを整理し、対応しているか、対応していないか、対応が弱かったりする授業科目を削減する。シラバスに示されたそれぞれの授業科目の目標がまず参照されることになるが、当該授業の内容や成績評価など、実績に即した判断も

求められる。なお、カリキュラムの学習目標との対応が難しい授業科目を「発展科目」などの科目群にまとめるということも考えられるが、授業科目削減という観点からは安易にとられるべき選択肢とはいえない。

開講実績から削減を行う方法もある。特に過去の数年の受講者数の基準を設け、それを下回り続けた授業科目を削減する。これはいくつかの大学で行われている。いわば学生の需要による判断である。ただし、知の拠点としての大学の役割に鑑み、ある一時期の学生の需要から授業科目の削減を検討することには議論を要する。カリキュラムの学習目標に対応しているのであれば、当該授業科目の受講者が少ないことは、時間割など授業内容以外の課題も考慮される。さまざまな可能性を考慮したうえで判断するのが適切である。なお、隔年開講にするなどの選択肢も考えられる。

複数の授業科目を統合する方法もある。たとえば、1単位の授業科目を組み合わせる2単位の授業科目とすることができ、クォーター制を導入した大学の中には、2単位の授業を行っていた授業を分割し、その結果1単位の授業が多くなる事態が生じた。従来一つの授業と



# 授業科目数の適正化のために

—下—

に調整する方法である。過不足のないカリキュラムを編成するうえで、今後この方法はより推進されるべきといえる。

必修科目を増やすことを選択科目を削減することもできる。必修科目で選ばれたカリキュラムの学習目標との対応も図りやすい。かつてであれば必修科目の設定は多くの学生が履修することから、制度や科目の設定は分野

に調整する方法である。過不足のないカリキュラムを編成するうえで、今後この方法はより推進されるべきといえる。

必修科目を増やすことを選択科目を削減することもできる。必修科目で選ばれたカリキュラムの学習目標との対応も図りやすい。かつてであれば必修科目の設定は多くの学生が履修することから、制度や科目の設定は分野

のような観点で、何のデュームで共有することができない。もちろん、自らのカリキュラムにおける授業科目を他のカリキュラムへ開放するようにしたい。異なるカリキュラムで学ぶ学生が履修できる制度や、学部間での共通科目の設定がいくつかある。授業が適切に達成したかどうかは、カリキュラムの改訂を行った際には把握しなければならぬ。

か、教職課程の履修、留學や就職活動などに不都合が生じなかったかなどである。学生アンケートの自由記述やインタビューなどの質的な情報から得られる示唆があるだろう。

教職員の意見もカリキュラムの評価において重要な要素だ。授業科目削減に要する目指された教育が実現されているか、それを達成するための到達点や、学内の方針の変化を受けて、授業科目数が増えるかもしれない。もちろん、十分に検討され、カリキュラムの学習目標の達成に寄与するものであるべきである。ただ無制限に増加が繰り返されてしまふのは問題である。たとえば、授業科目の新設の申請の手続きを厳格化する、カリキュラムの改編時には授業科目数のデータを参照する、授業科目の名称の設定を工夫する、新しい教員の公募などにおける担当授業の示し方に配慮するなどがある。現行のカリキュラムだけでなく、今後のカリキュラムが適正な授業科目数を維持していくために何が重要かを考えておくことも重要である。

授業科目数削減について学内の承認を得る過程は、従来のカリキュラム変更時とおおよそ変わらないことが想定される。ただ、内容の性質上、会議での承認を盾に関連する組織や一般の教職員に裁量を示すことも可能な限り行うべきである。全学的な削減を進めるとしても、実際にどのような削減を進めるかについては専門分野の知見をもつ教員の判断が不可欠である。教員自身が納得し、その後の大学教育に携わるためにも裁量の提示は重要な意味をもっている。

授業科目数適正化の議論を通じ、カリキュラムを通じて教育するという意識が関係する教職員の間に共有されていくことが期待できる。あるいは、組織的な教育への意識づけの契機として合意形成を図っていくことが大切であるともいえるだろう。

《参考文献》  
中井俊樹編(2002)『カリキュラムの編成』玉川大学出版部